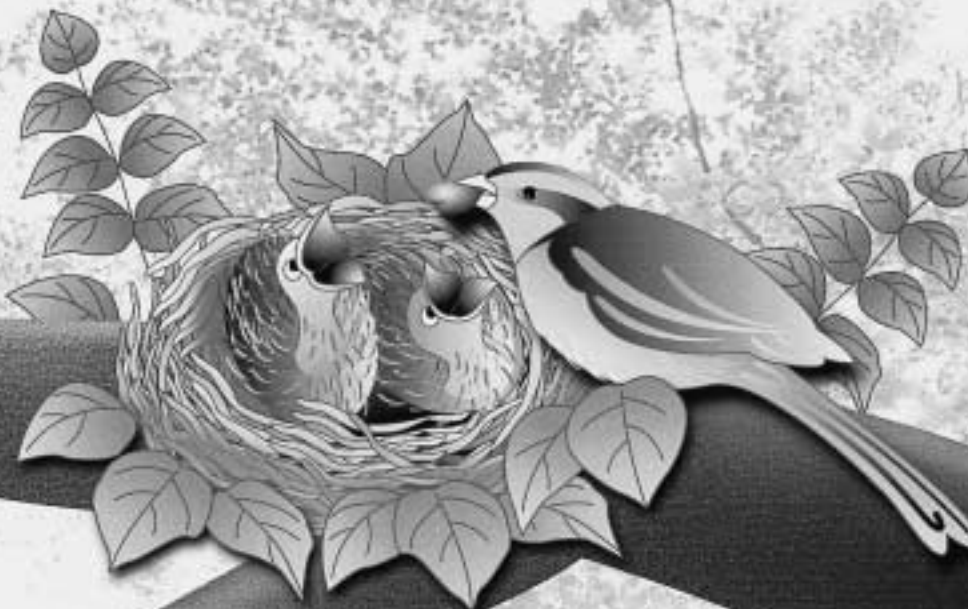


受け継ごう 「心の遺産」

古くさいと思われがちな歳時や風習ですが、
どのような意味があるのでしょうか？



家庭の役割

青少年非行の大きな原因は、「家庭環境」——

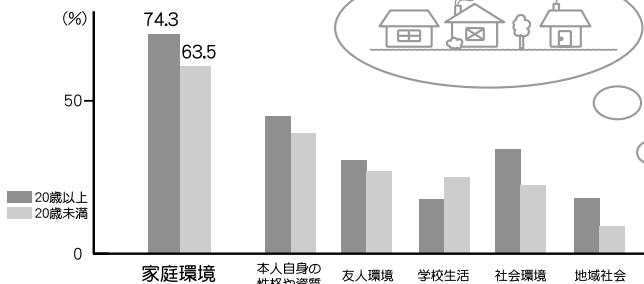
内閣府が発表した調査結果（下図参照）によると、青少年非行の大きな原因が「家庭環境」と答えたのは、二十歳以上で七四・三パーセントにのぼります。また少年世代を含む二十歳未満でも六三・五パーセントになっています。

このように、青少年の非行の大きな原因は「家庭環境」にあることが、あらためて指摘されました（月刊『世論調査』平成14年7月号）。

ひと口に「家庭環境」といつてもいろいろな点があげられますが、今回は、家庭の役割として大切な「生活文化の継承」について考えてみたいと思います。

それは、私たちの生活の中に息づいてきた文化が、親と子の心のつながりという点で大切な役割を果たしていると考えるからです。

〈非行の大きな原因〉



平成13年11月調査
内閣府大臣官房政府広報室

いっしょもち

東京近郊に住む池島隆さん（32歳）の長女・綾香ちゃんは、まもなく一歳の誕生日を迎えようとしていました。

隆さんは、この時期は仕事が忙しく、夜も遅く帰ることが多いため、綾香ちゃん誕生会は誕生日に近い日曜日に行うことにしていました。

ところが、その誕生会の一週間ほど前に、実家の母親から電話がありました。その日曜日に綾香ちゃんのお祝いに行く、そして「いっしょもち」をすると

いうのです。

池島さんの実家では、子どもが一歳の誕生日に、一升のもち米あわをついて足の形に似せたお餅もちをつくり、それを子どもに背負せわせる風習ふうじゆがあります。それを「いっしょもち」と呼んでいました。



「一升餅」と「一生持ち」の言葉をかけたものだそう、一生、食べ物に困らないように、という親の思いが込められていると、池島さんは子どものころに聞かされていました。

隆さんが、親として初めて「いつしよもち」を経験したのは、今、五歳になる長男の宏くんが一歳の誕生日のときでした。隆さん自身も一歳になったときと同じように「いつしよもち」をしたのですが、写真で知るだけで、記憶にはありませんでした。

隆さんの実家から、今住んでいる家までは、バスと電車、それに新幹線を乗り継いで、片道でおよそ五時間かかります。しかも、母親は日曜日の前後は用事があるため、日帰りであるというのです。





実家から母親がやって来るといっているので、奥さんの和子さんも普段と同じというわけにはいきません。家の掃除はいつもより念入りに、また料理の準備にも気合が入ります。すると、おのずから隆さんや宏くんに家事の手伝いが回ってきます。宏くんがいうことを聞いてくれないと、つい和子さんも声を荒げてしまうのです。さらに悪いことに、誕生会の前日になると、隆さんは風邪を引いて体調を崩してしまいました。

隆さんしてみると、
「古いしきたりにこだわって、わざわざ遠くから出かけて来ることはないのに。そんなことは、宏のときだけでいいよ。こちらにだって都合があるんだから」というのが正直な気持ちでした。

親の身勝手？

その日の朝、母親から、これから出かける、駅からはタクシーで行くから、迎えはいらぬ、と電話がありました。

やってきたのは、ちようどお昼ごろでした。二時には帰るからといって、和子さんの手料理をゆつくり味わうひまもなく、食事を済ますと、さつそく「いっしょうもち」の準備に取りかかりました。母親は、旅行かばんから橢円形に近い大きな紅白のお餅を取り出すと、一旦、神棚にお供えたあと、持ってきた風呂



敷しきに包んで綾香ちゃんに背負せおわせました。
二、三歩くのがやつとの綾香ちゃん
は、お餅の重たさに耐えかねて、
ふらふらとしりもちをついて
しまいました。そんな綾香



ちゃんあいの愛らしい姿を見て、母親も和子
さんも声をあげて笑いました。

しかし、隆さんの心中は
いささか穏おだやかではあ
りません。自分の体
調が悪いこともあつ
て、母親の言動げんどうが
とても身勝手みがってに思
えてしかたがな
かったからです。

あわただしく帰
り支度じたくをして家を出
た母親を、車こで最寄もよ
りの駅まで送る車中、
隆さんは母親に向かって言
いました。

「こんなにあわただしいのなら、無理し



て来ることはないよ。お金も時間もかかるんだから」

「そりゃ、そうだけど……。おとうさんが生きていたら、きつとそうしてやれと言うと思つてね」

「ッいつしようもち〃をやつて、どうなるつていうのさ。僕の知り合いなんか、だれも知らないよ。そんなことをして子どもが幸せになるんだつたら、こんな楽なことはないよ」

「……親の気持ちだよ」

「そんなの身勝手だよ！」

駅に到着したものの、いつもなら改札口まで見送る隆さんなのに、このときは車から母親を降ろすと、「それじゃあ！」といつて、そのまま走り去つてしまいました。



ふと、バックミラーをのぞくと、母親は、ほほ笑んで小さく手を振っていました。

風習に込められた祈り

「いつしよもち」は、「餅かるわせ」とも呼ばれ、子どもが立ち歩きを始める一歳の誕生日に行います。ワラジをはかせて餅を踏ませる地方もあります。

これまで生かされてきたことへの感謝と、これからもすこやかに、また一生、食べ物に困らないようにという祈りを込めて行われてきたものでした。

かつて、子どもの成長は危うかつたために、生命をつなぐための願いや祈りが形に表されたものです。今日でも、出産前の「帯祝い」に始まり、誕生後の三十

日目、百日目に行われるお宮参りなど、多くの風習が残っています。

七五三も、こうした子どもの成長を願う、祝うものの一つです。

今日のように、七歳は女兒、五歳は男児、三歳は男児と女兒が、十一月十五日に神社に詣で、千歳飴を買って帰るといふ形になつてきたのは、明治時代のことです、それも東京から広まり、今では全国的になつたといわれています。

子どものすこやかな成長は、親の切実な願いです。それを子どもの成育の区切

りごとに儀礼として表したものが、今日もなお生活に密着したさまじまな形、つまり生活文化として継承されてきているのです。

子どもの出生前から出生後、そして成人するまでの成育の途中には、数多くの儀礼が見られますが、そこには、子どもの無事な成長を見守る親の深い心情というものが、うかがえるのではないでしょうか。

日本の社会の底流には、社会全体で子どもの成長を祈り、無事にはぐくむという、私たちの先人の長い伝統というものがあり、それが風俗や儀礼となつて今日にも名残をとどめているのです。

(参考・生方徹夫著『伝統文化の心―歳時・

習俗に学ぶ』モラロジー研究所刊)



母親の思い にふれる

家では、和子さんが隆さんの帰りを待っていました。

「お帰りなさい。ねえ、せっかくだからお餅をいただくと思うの。宏も食べたいつていうから。切ってくれない？」

「分かった。……あつ、重い！」

「そうなの。それも紅白二つでしょ。二キ口くらいあるんじゃないかしら。それに、ほら！」

「それ、なに？」

「綾香のお祝い物よ。宏へのお土産みやげもあるわ。

まだあるのよ。あなたの好物こうぶつの佃煮つくだ煮。これは畑はたけで採とれたナスですつて、こんなに！」

お餅を切っていた隆さんの手が止まりました。

「知らなかった。お餅だけでも重いのに、ほかにもこんなにたくさん……どんなに重かったことだろう。そんなこと考えてもみなかった。かあさんにとつては、それほどまでして「いっしょうもち」をする意味があつたんだ。それを「身勝手」だなんて……」

「おかあさん、喜んで帰られて、よかつたわね」

そんな和子さんの言葉に、隆さんは「そうだね」と言い返すのが精せいいっぽいでした。



隆さんの脳裏には、車を降りて隆さんを見守るようにじつと立っていた母親の姿がよみがえってきました。

そして、「親の気持ちだよ」「お父さん

が生きていたら、きつとそうしろと言うよ」という母親の言葉が、繰り返し思い出されてきてしかたがありませんでした。

「親って、親の願いつて、こういうものなんだ……」

隆さんは、はるばる片道五時間をかけてやってきてくれた母親の愛情と、亡き父親の思いに触れたのでした。

親と子のきずなは、親の思いに子が触れたときに、いつそう深く、強くなっていきます。

隆さんは自分の都合ばかりを考えて、親の思いを感じられなかった自分に気づきました。めんどろで、意味がないと思っていた「いっしょうもち」を通して、自分や自分たち家族が、親の大きな

愛情に包まれていことに気づかされま
した。

同時に、隆さんは、親元を巣立って
いく子の立場から、親が悲しい「別れ」を
受け入れなければならぬ存在であるこ
とを、母親の姿を通して心に刻んだので
した。

「四鳥の別れ」という言葉があります。
桓山の鳥が四羽の雛を生み、やがて育つ
た子の鳥が四海（世界）に飛び立とうと
するとき、母鳥が悲しんで鳴いて送った
という中国の故事（『孔子家語』）から、親
子の悲しい別れのことを言います。

親は、子を突き放していく厳しさを、
図らずも子と別れなければならぬとき
の辛さや悲しきを受け入れる心をもつて



子どもを育てていきます。

こうした親としてのあり方は、先人・
先輩によつてはぐくまれてきた長い伝統
にもとづく生活文化を通して、私たちは
身につけていくことができるのです。

失ったものを取り戻そう

今日の日本は、先人・先輩のたいへんな努力によって、物の豊かな国になりました。

しかし一方で、これほどかけがえのない親と子の関係を、いとも簡単に断ち切ってしまうような悲惨な出来事が起こっています。豊かさを得て失ったものの大きさを、あらためて感じないではいられません。

失いつつあるものの一つに、「文化の継承」があげられます。

たとえば、長い歴史を経て、私たちの

家庭生活の中に根づいてきた風習や儀礼などの年中行事は、古めかしいもの、形式だけで意味がないもの、というように受けとめられ、次第に継承されなくなってきました。

しかし、よく見つめ直してみると、それらの多くには、「親と子のきずなを深めていくこと」「自然とのつながりに気づき、感謝すること」「地域とのつながりを大切にすること」など、私たちの先人のよき生き方や感じ方が表れています。

同時に、それらは現代の日本人が失っ

できたもので、今後、取り戻していか
なければならぬことばかりです。

風習や儀礼などの形は常に変化して
いくものですが、それらの底に流れる日
本
のよき伝統文化の意味や精神は、再生
産し、継承していくことが、大人世代の
大切な役割です。

文化は、先人が後世に遺した、目には
見えない「心の遺産」です。今に生きる
大人が、この「心の遺産」を忘れてし
まっている、つまり「文化の喪失」が、
子どもたちの心の成長にさまざまな影
響を与えているといってもよいでしょう。



身近な文化に 目を向けてみよう

親の生き方は、日々の家庭生活の中で知らず知らずに継承されていきます。それが家庭の文化といわれるものでしょう。

子どもの心の成長にとって大切な「家庭環境」をよりよくしていくためにも、まず、身近にある、よき伝統文化にもっと目を向けて、先人や先輩の心を汲みとっていくことが大切なことではないでしょうか。

